

(大会実行委員会協賛ではなく)
KMS(川・森・関)共同出資による

エプロン開発物語



2016. 7. 27 初稿/8. 1 再編集

群馬/川島滋弘 qwyc2855@yahoo.co.jp

■「幸せの黄色いエプロン」



大会会場に入って、黄色いエプロンを着た人たちがやけに目につきませんか？

一応これは大会スタッフの目印となっているのです。つまり実行委員の「大会ユニフォーム」とでも言ったらよいのかもしれませんが。

大会期間中、何か困ったことや分からないことがあったらこの黄色いエプロンを着た人に声をかければ、必ず何らかの対応してくれると思います。

■なぜ、エプロン？

理由は単純です。大会期間は3日間。同じものを着続けるにはTシャツよりいいからです。途中で洗濯しなくても汗臭さを感じなくて済むからです。大会が終わったら給食当番の配膳や図工の時間にも使えるし、家で日曜大工や家庭菜園をするのにも使えるではありませんか。正に「一石三鳥・一石四鳥」のシロモノです。こんな素敵なアイデアを出したのは森下知昭さん。

渡良瀬サークルのメンバーが集まって「大会では毎回どこも記念Tシャツを作っているけど、群馬も作るか？」となったとき、「いや、Tシャツはやめよう！確かに格好いいけど、僕たち男ならまだしも、女性スタッフは3日間着続けるのはキツイでしょ。だったらエプロンとか、資料を入れる封筒の代わりにトートバッグなんてどうだい」と提案してくれました。

■会議は踊る、されど進まず

さあ、そうなれば後はとんとん拍子に話が進む……と思いきやアニハカランヤオトウトハカランヤ、そう簡単に事は進みません。

「参加者が伊香保大会を盛り上げるために払ってくれた貴重な参加費を、一部の者である実行委員メンバーだけのために使ってしまったの？参加費というのは基本的に参加者に還元するのが本筋だろう」と、大会の基本コンセプトに関わる重要な議論が巻き起こったのです。

議論は白熱。「いや、実行委員は大会運営のためにそれだけ働いているのだから、それくらいはみなさんも暗黙の了解をしているのではないか？」
「いやいや、それはあまりにも傲慢というものだ」……。

しかし一向に「伊香保大会はこういう方針で行こう！」という決定打を打ち出す者は誰一人としていませんでした。

「せっかく大会を誘致したのに、他の企画も含めていろいろあるけど、自分たちのやりたいことを実現できないのなら…、いやいや、そもそもこの大会で何をやりたいのか一向に打ち出せていないじゃないか!? そちらの議論をする方が重要だ！」

そこで、川島・森下・関本のオジサン三羽鳥は

「分かった、独立採算でやろう！ それならお遊びでボくら3人が勝手にやっちゃおう。こんなきっかけでもなければやることはないだろうし。作ってみてどれだけボクたちの心意気を感じて買ってくれる人がいるのか、それを実験してみるいいチャンスじゃないか」

ということで、ようやく実現される運びになったのです。

■さて、デザインはどうする？

川島の弟が埼玉・川口で小さなプリント会社をやっているの、そこを頼ればなんとかなるだろうと、独立採算のエプロン作りが始まりました。

「格好いいのを作るぞ。群馬はおじさんが多いから、おじさんらしくシックに決めたい」という思いはあるものの、なかなかコレだ！という案は出ません。

「やはり水分子か？」「東京は山猫マークだったな」と頭をよぎり、「そ

れならそのふたつを入れて〈勝手気ままに動き漂う水分子の上に、ドッカと山猫マークを乗せよう〉とデザインイメージが決まりました。

そして版下作り。しかしこれがなかなか大変。

はじめは渡辺みゆきさんの《もし原》の絵カードをスキャナーで読み込んで、それを切り貼りしてみました。「モル敷」をスキャンしたり《もし原》の絵本から採ってみたい…。でも、1コ1コの水分子を切り取って並べ替えても、切り口がみんなギザギザになってしまいとても使えるものではありませんでした。

その後川島がかなり苦労しながらワードを駆使して水分子を作りあげたのですが、オジサントリオは

「ちょうど一億倍にしたい」「酸素と水素の結合角度がデタラメなのが気に入らない」などと非難の嵐。

また、山猫マークは仮説社のブログに載っていたのをエプロンに合う大きさに拡大すると、こちらも輪郭がギザギザ。やはりきれいなものではありません。「まあ、いいか。これだけであれば上等だよ」とかなり妥協してはみたものの、なんとなくモチベーションも下がり気味。

■あきらめなければ報われる

「そろそろ最終デザインを送らねば、お披露目の〈心円祭〉に間に合わない」となった頃、東京の荒井公毅さんと千葉の平野孝典さんが科学の碑の整備の件で住職の雅子さんと打ち合わせに来るとの情報。

それもちょうど科学の碑サークルの例会の時。

そこで何の気なしにエプロンのことを話したら

「山猫マークなら、僕がデータを持っているよ。送ろうか？」

と、悩みは一気に解決。水分子は川島が描いたワードの図でということになりました。著作権のことが気になりましたが、後日平野さんから送られてきたメールには

山猫マークの著作権は消滅しています。

あえて挙げれば、

- ・掲載誌の提供：板倉先生、
- ・原図化：竹内三郎、神山武憲
- ・データ化：平野孝典が関与しています。

大々的に商売するのでなければ、問題ないと思います。

あっ、板倉先生はよく食べ物をこぼすので、エプロンがあるといいかも。

いろんな角度から見た1億倍の水分子のデータ (pdf, B4判) も一緒に添付しました。何かの参考にお使いください。

なんとありがたいお言葉。その上きれいな水分子まで。「これは使わない手はない」ということで出来上がったのでした。メダシメダシ！

※

ところでこの伊香保大会は、実働部隊である渡良瀬サークルを中心とした群馬のメンバーと、それだけでは運営できないので、東京大会をまねて全国的に実行委員を募集して呼びかけたところ、それに応えて大会をサポートしようと立候補をしてくれた人たちとで成り立っています。

その連絡調整を図るためにメーリングリストを立ち上げました。3000 円の会費を支払うことを条件に、よりよい大会にするために発言する権利と義務、また発言しない権利をも有する人たちです。

実働部隊の渡良瀬サークルのメンバーだけでは議論が煮詰まってしまうこともありました。そんな時、さりげなく的確なアドバイスをくれたり、発言はないけれど僕らを信じて黙って見守ってくれていた方たちももちろんいます。

しかし、紆余曲折を経ながらも大会本番を迎え、多くの参加者のみなさんがより心地よく過ごせるように・大好きな仮説実験授業がより発展するようにと、自らの意志でどんどん動いてくれるのです。

これは仮説実験授業に関わる人たちに共通して言えることです。「自分のやっていることが他人の笑顔につながることを最上の喜び」と感じる人たちの集団なのです。「人の笑顔が見たくってついつい動き出してしまう」、そんな素敵で人間を生み出してしまうのは、仮説実験授業の底を流れている徹底したヒューマニズムがあるからなのでしょう。

オジサンのお遊びで始めたことですが、もしかしたらそんなことにもつながっているのかもしれないと思うと、まさに「〈幸せの黄色いエプロン〉」と呼ぶにふさわしくなったなあ。ああ、やっぱり作ってよかったなあ！」と心からそう思えるのです。